

[タイ]

陶芸でバンモー村の村おこし

新たな陶芸品作りが始まり、村が活気づいている。
その指南役は趣味で陶芸を極めた一人の日本人だ。

Close Up!

ジャイカのあしあと



3 くるの上で回転する陶土の塊を慣れない手つきで筒状に成型していくバンモー村の女性。「ふたを作ったら、周りにへらで花柄の透かしを入れよう」。彼女たちが手掛けるのは、アジアで広く使われる香炉。乾燥後にガス窯で焼成し、表面に釉薬を施して再び窯で焼けば完成だ。

女性のそばでろくろの手ほどきをするのは、シニア海外ボランティアの丹治能彦さん。某電器メーカーの元エンジニアという顔を持つ傍ら、30年以上に及ぶ趣味で極めた陶芸の技術を、陶芸家を目指すタイ・イサン地方の大学生に伝えると同時に、陶芸で村おこしを推進するのが丹治さんの仕事だ。

村で主に生産しているのは5000年前と変わらない土鍋、水がめ、しちりん。しかし、近年の工業化に伴いアルミ鍋やプラスチック製の保冷ジャー、ガスコンロが登場し、村の素焼き土器の需要は年々低下している。そこで、皿や丼、香炉など新しい製品作りを提案するとともに、陶土や釉薬の材料・配合に工夫を凝らし、付加価値を少しでも高めようと自ら村人

にやって見せた丹治さん。「それまでも目分量だったので、製品の質を安定化させるために分析に基づく正確な数字を教え、なぜそうしなければいけないかをきちんと説明しました」。丹治さんの腕前は瞬く間に隣村に知れ渡り、見学や指導依頼が殺到した。

丹治さんが指導に当たる前は、手びねりに野焼きという伝統的手法を用いていたバンモー村の人たち。「彼のおかげで生産性が向上し、商品価値も高まった」と喜ぶ。1個の卸値40バーツ（1バーツ＝約3円）の香炉がバンコクだと約300バーツで販売でき、収入も伸びているそうだ。

皿や丼は、バンコクの日本料理店などから早速サンプルオーダーをもらっているという。いつかバンコクを訪れるあなたも、気付けぬ間にバンモー村の陶器を手にするかもしれない。

